

編輯後記

誰も物を言ひたい。思つてゐることを吐き出したい。が、どうも反吐を吐くのは氣持のいいものではない。まして公衆の面前で「諸君、我輩は。」とか何とか云つて之れから七色の粉々たる反吐を御覧に入れるのは恐怖に價する。

俺は、靜觀しやう。黙つてゐると何かある様に見える。成程之は最も經濟的な處世法である。

俺は批評しやう。Aの反吐を分析すると馬鈴薯が八割で、あの赤いのは人蔘が何かであらう。すると残りの一割は何でも湯か茶に相違ない。大して俺と變つてゐないぞ。唯俺の持たないのはあの赤い人蔘だけだ。俺はあの馬鈴薯のナマツ白さを攻撃すればいい。俺は反吐は吐かない。沈黙は金とは成程いい言葉だ。かうして彼は一生を終つた。彼は一度も反吐を吐かなかつた。山の様に沈黙を守つた。僕は彼の説法に感心したが、そう云ふ沈黙は路上の馬糞も亦固守してゐる沈黙であつた。

子曰詩三百一言以蔽之曰思無邪

かう云ふ言葉は取り落さないでもいいと思ふ。

僕は言葉を思つた。

手をはへないと思つた。時としては走りすぎた。光りすぎた。跳りすぎた。僕はぐつと押へて放してみた。言葉は既に死んでしまつてゐた。

僕は言葉を思つた。

言葉には形がある。それから各々特自な色がある。まだ匂ひを發見しない僕もこの變化と無際限には壓倒された。僕は言葉と、とつ組んで見た。僕は忽ち押へつけられてゐた。言葉に負けないためには、それを知るより外に道はないと思つた。それ故、僕は絶えず言葉を睨んでゐる。時々はその無限大に途をゆづりながらも――

平面のみを觀察するときその人の言葉は自信を持つてくる。平面の後方にかすかにゆらぐ立体を發見したとき、その人の言葉

は動搖する。立体を觀察しつくすためには少くとも一方のみに立止ることは許されなからである。

けれども矛盾と動搖とを越えて俺は進まうと思ふ。俺の見たものを自信を以て、動搖する自信を以て、言ひ切らう。ニイチエも自らのツアラツストラについて言つたではないか。あらゆる精靈中の最も肯定的なるものは、一語毎に矛盾する。彼の中には、あらゆる反對が新しき統一に結合されてゐる。――(此の人を見よ。)

――十一月校正後。永積安明

詩、歌、句、共に五高生としてのレベルを越えたものをすべて一様に入選作として發表することにして等級は附せぬことにした採点については八波教授金山教授は色んな事情で、不可能となつたので、上田教授を御病氣の所を無理にお願いしたのである、俳句が比較的よく、詩が此れに次いでよく、全部を通じて特に一等として推す作品

はないとの事であつた。

評は一時廢止されて居たが、今回又之を復活させた、よく味はれたら得る所少なからざるを信ずる。

懸賞號にはうんと力を入れた積りだ、表紙、紙質、編輯様式等々、皆で頭を悩ましたものだ、財源に限りがある部の仕事として、如何に努力したかを察して戴きたい。「お前途の仕事は小使の仕事みたいだ」と

言ふ輩が居る、そうだ、唯僕等は熱愛に燃えて居るのを知るのみ

衰頹を歎げかれた龍南詩歌壇に第三次とも言ふべきク翼クが華々しく發行された。健全な發展を祈つてやまない。(佐々木幾)

× 私の神經は疲れてゐる。

× 「お休みなさい」と醫師は言ふ。
× けれど私はなほ筆をとる。

龍南人全体が心して生みだした赤ん坊だ可愛いい可愛いい、私達の坊やだ、私はこの雜誌に父として除の温いキッスをあたへ

すにはおられない

× きれいな表紙だ。村岡君の苦心の作だ。ひまわりは太陽に向つて顔をもたげる。

みずくしい葡萄を頭上高くか、けて太陽に叫ぶ男は「收穫」の表象だ。ひまわりの蔭に腰を下した女の瞳は大地にながられてゐる、それは「沈黙」の表象だ。「收穫」と「沈黙」——それは即ち龍南の文壇を表象する。

× 扉。(表紙は古代ギリシヤの香がする。)

扉の文字はギリシヤ文字だ。「龍南」とよむ岡本教授にお願ひして書いていただいたものだ。

× 内容について私は多くを語らない。唯讀んで下さればすべてが分るはずだ。

× 小説を見せていただいた。皆、私に何かしら暗示をあたへた。面白かつた。言ひたいこともあるが嘴の黄色なくせに、あつたましい批評は止めよう。

御批評をお願ひした諸教授の方々にお禮を申上げる。

「こゝろ」は地平線を貫き上つた作だつた

—(二三)—

残念ながら選者諸教授の御注意により、(作者の了解をえて)發表することが出来なかつた。

けれど、のぼりかけた太陽は何時かは眞赤な顔を現はさないでは止まない。作者は今向上への努力の道におられる事と思ふ。

× 採點表は平均點をもつてした。くはしいことを知りたい人は私の方でおしらせしていいと思ふ。

× とにかく、この位、がんばるためには會計として頗る危険な道を歩いて來た。今度位「せちにかねをほりせり」の時はなかつた

× 生れたんだよ。私はもう一度、温いキッスをあたへて、この可愛いい、可愛いい坊やの誕生を皆さんと祝ひたい。赤飯をたぐんだ。

× 私の神經は疲れてゐる。

「お休みなさい」と醫師は言ふ。
私はうなづいて筆をおく。(坂本浩)